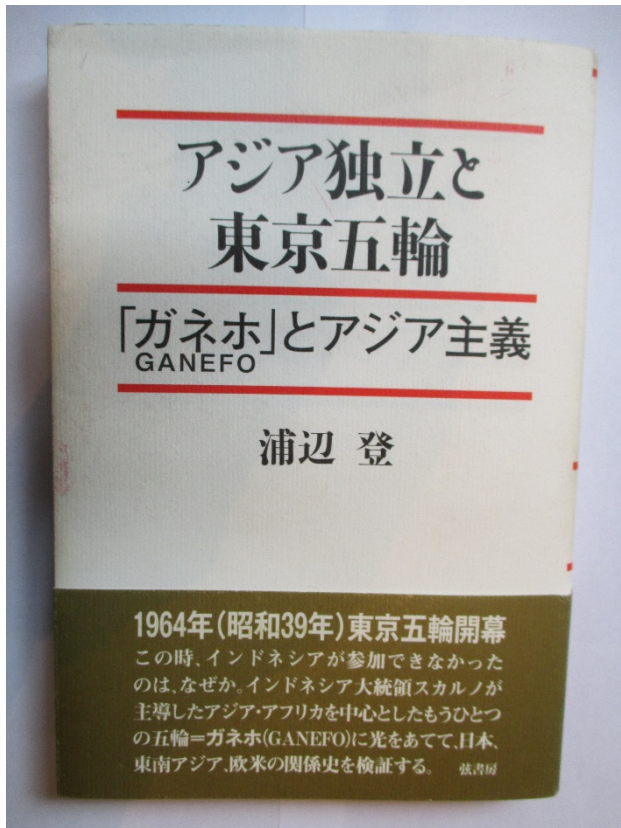


もうひとつのオリンピック (GANEFO)

ガネフォ水球

内田 啓一 (82歳)

(日本大学出身)



「光陰如矢」あつと言う間に56年、半世紀以上が駆け抜けました。多分、多くの人の記憶にないことと思います。思えば1963年11月、日本体育協会、日本水泳連盟の猛反対を振り切って、通称「GANEFO」(Games of the New Emerging Forces) 新興国競技大会に参加致しました。6年前この大会の50周年記念の年に「アジア独立と東京五輪」「ガネホとアジア主義」浦辺登著が出版されました。

いきさつを古い記憶を辿りながら綴ってみました。この競技大会開催のきっかけは、昭和37年8月、インドネシアのジャカルタで第4回アジア競技大会が開かれました。この大会は、

大統領スカルノの存在を強く世界にアピールすると同時に、「アジア、アフリカという新興勢力を盟主に」と考案されたものでした。

残念ながらこの大会憲章で、政治とスポーツが密接な関係にあることが明らかにされました。開催国のスカルノ大統領は、親中国、親イスラム諸国の意向により、中華民国とイスラエルを招致しなかったことが発端となりました。この事態にIOC(国際オリンピック委員会)は、オリンピック精神に抵触すると判断、第4回アジア競技大会を正式な国際大会として公認しないと表明しました。さらに、インドネシアのIOC加盟国としての資格停止を決議しました。

これに対抗してインドネシア、アラブ、アフリカ諸国は翌年の第18回東京オリンピックのボイコットを示唆するなど対立が強まって参りました。インドネシアはIOCを脱退するや、ソ連、中国を中心とする社会主義国とアラブ、アフリカ諸国に賛同を求め、オリンピックに対抗しうる国際競技大会である「新興国ス

ポーツ大会」を開催すると発表しました。それが GANEFO です。

これに対して I O C は反論処置として、この大会に参加する選手は、オリンピック並びに各世界選手権国際大会に出場する資格を失うと発表しました。私をはじめ日本からの参加選手は一大決心（日本水泳連盟を脱退）、覚悟しての出場でした。この大会の開催国インドネシアは、世界にアピールするためにもアジアの雄、経済大国である日本の参加が絶対条件となりました。現地では「日本不参加阻止運動」が広がり始めました。スカルノ大統領の親日家は良く知られていました。対インドネシア平和条約締結による戦後賠償問題は、日本の総合商社の協力により経済支援が行われました。日本への留学や国民に向けた人的交流等、国全体に親日ムードが深まりました。一方、東京オリンピックを目前に控えた日本政府は立場上、参加を表明することは出来ませんでした。日本からの参加実現のため、財界、総合商社、一部の政治家（特に当時副首相の川島正次郎）による水面下交渉の末、何とか日本の参加が認められました。大会に出場するに当たり、日本選手派遣組織委員会が発足。主に財政に基盤を持つ慶応大学関係者が中心となり編成されました。団長には、明治、大正時代の政界フィクサー頭山満の孫、頭山立國氏が選ばれました。彼は慶応大学在学中から「東南アジア学友会」の理事長として留学生を支援し、とりわけインドネシアとの友好が続いていたそうです。

私達の日本水球チームの編成は大会 2 か月前に始まりました。当時の関東大学水球リーグの一部校である日本大、中央大、法政大、成城大出身の精鋭 12 名の社会人軍団でした。練習するにも当時は、東京近郊には、温水プールなど無く、南伊豆河津、峯温泉プールにて合同練習の繰り返しでした。

日本選手団は 9 種目、水泳（水球、競泳）、陸上、柔道、卓球、バドミントン、フェンシング、ヨット、レスリング、ボクシングの計 96 名の選手団となりました。開催国インドネシアは 486 名の選手団を参加させましたが、中国はそれを上回る 497 名の選手を派遣し、アメリカ、ソ連に次ぐ第 3 勢力国の出現に世界のスポーツ関係者を驚かせました。

従来からオリンピック、アジア大会は国をあげての統合競技の祭典であり、互いに親睦友好を深める場所でもあります。選手、役員が一堂に会するため同地域内の「選手村」に宿泊することになります。宿舎は木造 2 階建 10 室、1 室 2 名ベッド部屋でしたが、当時は冷房などの設備はなく、窓は開放するため蚊帳吊り部屋の生活でした。選手村のレストランは、インドネシア、中華、西洋料理の 3 種類でしたが、ヤシの食用油使用のため、下痢に悩まされる選手が続出しました。村内には銀行、郵便局、商店街などが軒を並べ、急病人に備えた診療所もあり、内科、外科、歯科、10 床の入院ベッドが設置されていました。大会期間中、古市駐在インドネシア大使には、物心両面から大変お世話になりました。我々選手に、現地邦人の心からの感謝の言葉を涙ながらに語られ、過大なご支援をいただきま

した。

いよいよ11月10日、午後4時30分、ジャカルタ郊外にインドネシアが誇るスナヤン大競技場、日本人大観衆のもと参加51カ国、2700名の選手、役員入場大行進、聖火台に火が灯され、2週間の大会が始まりました。

我が水球チームは参加国6カ国、アルジェリア、アルゼンチンと対戦し、予選は楽に勝ち上がり、決勝戦は地元インドネシアと対戦し2対0で惜敗しました。地元の利とはいえ、彼らの水中でのあまりに汚いラフプレーに試合を中断してまで抗議しましたが、受け入れられず、結果は準優勝の銀メダルでした。この大会での日本のメダル獲得数は、金メダル3個、銀メダル9個、銅メダル9個で、参加51カ国のうち6位との事でした。

大会期間中、忘れられない出来事が起こりました。大観衆のもと大会前夜祭が催されました。各国代表がその国の歌を披露することとなり、我々日本からは旧日本兵が現地に伝え残したという「支那の夜」を合唱しました。歌い始めるやいなや、中国の役員が、目を吊り上げ、血相を変えて飛んで来ました。我々選手たちの胸ぐらをつかみ、何か罵声をあびせました。会場は一瞬水を打ったように静まり返りました。彼らの言っていることは、「貴国は支那という旧帝国時代の地名をあげ、我が国を侮辱した。よって正式に陳謝せよ」と抗議。日本側は、「我々のこの歌は昔からみんなに親しまれ、受け継がれた庶民の歌で何ら意図はない。」と主張しました。最後にインドネシアの将軍が仲裁に入り、やっと和解しました。やっと2週間の大会は終了し日本選手団は安堵の気持ちで閉会式へと臨みました。

幾多の苦難を乗り越えて参加した誇りと我々の行動が、いささかでも日本の国益に貢献できたこと、翌年の第18回東京オリンピックの大成功に心から感謝いたしました。半世紀以上が過ぎた今、私にとって「GANEFO大会」は若き日の情熱、経験として人生の宝物になっています。



古川 房野 (私) 内田

尚、帰国9年後の昭和47年10月、日本水泳連盟は、水球委員長・小谷氏、および水球委員会の了承のもと、我々全員12名（故 田中信義、浜野武人、菅久尚武を含む）の日本水泳連盟への復帰が認められました。